大学出版

大学と社会を結ぶ 知のネットワーク

NO.72
2007.11
夏
秋

特集　第11回日本・韓国・中国大学出版部協会合同セミナー

中国の変貌と大学出版部の行方　山口雅己……2

日本の大学出版部における組織運営形態　三浦義博……6

日韓中大学出版部の採算管理問題　後藤健介……11

【座談会】ブックフェア「ナチュラルヒストリーの時間」を振り返って……15

●連載

初版本、ナンセンスなフェティシズム

ブルーノ・タウト著『ニッポン　ヨーロッパ人の眼で見た』　酒井道夫……表2

大学出版部ニュース……22

有限責任中間法人大学出版部協会
THE ASSOCIATION OF JAPANESE UNIVERSITY PRESSES

初版本、ナンセンスなフェティシズム

ブルーノ・タウト著『ニッポン　ヨーロッパ人の眼で見た』

酒井道夫（武蔵野美術大学）

下から、角背の初版、丸背の第二刷、天金丸背の第三刷の『ニッポン』

当初私が所有していたブルーノ・タウト著『ニッポン　ヨーロッパ人の眼で見た』は森儁郎訳（明治書房、一九四一）で、戦時体制下のみすぼらしいソフトカバー（戦時改訳版）だったが、ある必要に迫られて調べてみると初版（一九三四）から第四刷（一九三六）までが平居均訳。戦後には篠田英雄訳（春秋社、一九五〇）も刊行されている（現行の講談社学術文庫版は森儁郎訳）。つまり三つの異なった翻訳があったのだ。

戦時版は一〇版以上版を重ねたらしい。本文用紙は版毎に目まぐるしく変更され、なかには仙花紙本もある。六〇点弱の図版を粗末なアート紙ページに掲載。桂離宮や法隆寺を中核に据える写真構成だが、孤蓬庵、西芳寺庭園、奈良十輪院、能面の般若と孫三郎など、初版にはなかった写真一七枚が加えられ、ほぼ盤石の皇国史観を補完している。

ところで、初版本集めなんて好事家のすることだという思い込みに反して、初版『ニッポン』の造本には一驚した。深い藍色の布装で初版が角背、第二刷が丸背。第三刷以降は面目を一新して生成の麻布装、函入り天金丸背（装丁は、初版から一貫して池田木一）。

初版を手にしてもっとも驚いたのは、二三五点の図版が収録されていたこと。その一部を紹介すると「乞食―若い頑丈な男（確かに道端で男が寝ているが本当に乞食か？）」「釣ランプ（浮世絵の婦人入浴図部分）」「赤子をおぶった男の子」「畳の上の古いあいさつ（際限のないお辞儀の応酬を皮肉った外国マンガ）」「旅館の或るシーン（深更におよぶ旅館での宴会の狂態を描いたマンガ）」「気持のいい向い合わせ（車中で向かい合わせた大股開きの男客。タウトによるスケッチ）」「外国人の面（能面の悪尉）」……。

タウトは当時の日本人の生き生きとした日常を、同じ生活者としての目線で捉えていたわけで、これでは純粋日本美の称揚には馴染まない。タウトの没後、改訳に合わせてちゃっかりカットしたか。初版恐るべし。

特集

第11回日本・韓国・中国大学出版部協会合同セミナー

中国の変貌と大学出版部の行方

山口雅己（理事長、東京大学出版会）

セミナー参加にあたって

第11回日本・韓国・中国大学出版部協会合同セミナーは、二〇〇七年八月二七日～二九日という日程で、中国・浙江省都杭州の浙江大学科学技術園・国際交流中心を会場として開催された。セミナーの主題としてホスト国・中国大学出版社協会から二〇〇七年一月の段階で提示されたのは、「大学出版部の経営管理問題――一．大学出版部の管理体制プログラム、二．大学出版部の財務・税務管理問題」というものであった。具体的には、「企業統治制度に基づく経営管理、非営利組織的運営に基づく経営管理、企業でも非営利組織でもない方式で行う経営管理」を論じるレポートと、「大学出版部の原価計算・原価管理、納税方式と税種・税率と税額」を論じるレポートとを、それぞれ一編ずつ要請されたのである。

二〇〇六年八月に開催された第10回京都セミナーでは、「三カ国交流10年の回顧と今後の展望」と「国際学術交流と大学出版部」という二つのテーマに対する総括的な発表が三カ国の大学出版部協会による「協定書」の調印へと結実し、その後ソウル大学で開催された「三カ国大学出版部合同ブックフェア」のように具体的・実質的な協働事業の実現へと歩み出す準備を固めることができた。これをもって私たちは、京都セミナーの成功を自賛してよいだろう。この協働事業を拡大する方向で三カ国セミナーが継続する、という私の予想は、しかしながら見事に外れてしまった。中国の大学出版社にとって、自国における改革開放・市場経済化の波をどう受け止め、その中でみずからの存在意義をいかに高めていくか（有体に言えば、競争市場に参入して利潤をあげるにはどうしたらよいか）が最大の関心事であることに、あらためて気づかされた次第である。

私たちのレポートが示唆するもの

杭州セミナーへの参加に際し、私たちは「日本の大学出版部における組織運営形態」と「日本における大学出版部の財務と税務――出版企画の経済設計と税制度を中心として」という二つのレポートを用意した。「創新型国家の建設」という国家戦略を受けて、中国の高等教育人口は近年、飛躍的に増大し、二〇〇六年には大学進学率二一％、学生数二三〇〇万人というレベルにまで到達している。これに伴い書籍の発行点数も着実な伸長を持続しており、中国はいま、市場経済における「出版の離陸期」を越えつつあると思われる。このような状況において、現在は国家の管轄にある出版事業が、将来、個別の法人（経営主体）に開放された場合に備え、全中国の出版社五三七社の一八％、九八社を占める大学出版部が個々にどのような組織をつくり、運営していくべきかをあらかじめ研究しておく意義はたいへん大きいと言える。一般化されたかたちではあるが、日本の大学出版部がどのような経験を積んできたかを伝える上述のレポートが、中国・韓国の大学出版部の役に立つことは間違いないであろう。

日本派遣団メンバー

ところで、後掲する私たちの第一のレポート（三浦レポート）は、中国大学出版社協会により提示された主題と少しずれたものとなっている。それは「管理体制プログラム」という述語が、日本の大学出版活動にそぐわない、違和感の拭えぬものであることに起因している。その結果、「日本の大学出版部の設立形態とそこから出てくる組織運営の違い」という視点からのレポートとなったのである。第二のレポート（後藤レポート）にしても、まとめるのはなかなか大変だったであろう。その作成にあたった三浦氏、後藤氏、そして元・京大の小野氏に、また、側面からご支援いただいた方々にあらためて感謝申しあげ、その労を多としたいと思う。また、これらのレポートは、日本の大学出版部の現状、あるいは社会的制度との関わり等における「差異」を浮かび上がらせ、私たちがみずからを見つめ直す、たいへんよい機会を与えてくれるものであることを、ここに強調しておきたい。

セミナー総括

さて、セミナーでは、予定通り三カ国から二件ずつの発表がなされた。この場をお借りしてセミナーで得た印象を述べて、全体的な総括としたい。

繰り返しになるが、日本からのレポートを作成することは、私たちそれぞれ個別の大学出版部の存在や活動における「差異」を見つめ直す、よい経験となった。こういった現状を踏まえたうえで、すべての加盟出版部のパフォーマンスの向上にすこしでも寄与できるよう、大学出版部協会として今後どのような活動を企画していくかが重要であることを、あらためて確認しておきたい。わかりきったことをいまさら記すようで心苦しくもあるが、各位のご協力を賜りたいと思う。

一方で、後掲のレポート（とくに第一主題）が中国側の期待に合致したものだったかと問われると、自信をもって「イエス」とは言い切れない。実は昨年、京都セミナーが成功裏に閉幕した数日後に中国訪日団が東京大学出版会を訪れ、一時間以上話し合う機会をもったのだが、そこで中国側から、優秀な社員の養成法や給与体系の問題に関する、たいへん現実的な質問（いい仕事をした人には特別のボーナスを支給するのか、役員報酬は初任給の何倍か等）を多数浴びせられた経験がある。このことから類推すると、中国サイドでは大学出版部の「管理体制プログラム」を構築するために（あるいはそれを、より向上するために）すぐに役立つ実践的な情報――たとえば日本の大学出版部の「なんら包み隠すところのない」ケーススタディのようなもの――を欲していたのではないか、とも考えられるからである。

韓国大学出版部協会のレポートは、とくに目新しい情報をもたらすものではなかったと感じている。とは言うものの、効率的なマーケティング手法の追求や、原価計算・損益分岐点の管理等、自社の現状との比較でこれらのレポートを読み込んでみれば、参考にできる出版部はけっして少なくないだろう。是非トライしていただきたい。

問題は中国大学出版社協会のレポートである。中国の出版事情についてはいくばくかの予備知識を集めたうえでセミナーに臨んだつもりであったが、その準備がまったく不足したものであったことを思い知らされた。

まず、統計数値に関することがらでは、大学出版社の年間売上がたいへん大きく、九〇〇〇億円と言われる中国の書籍売上に占める大学出版社の比率も相当高いという事実について認識が浅かったことを、明らかにしておかなくてはならない。刊行「点数」（新刊六割、重版四割程度の比率）の多いことも同様で、一九九九年からの五年で五〇％の伸びを記録し、二〇〇四年には二〇万八〇〇〇点を優に超えている。刊行点数上位ベスト5は高等教育出版社（六三八二点）、科学出版社（五二四〇点）、人民教育出版社（四四

九七点）、北京出版社（二八七〇点）、清華大学出版社（二六五四点）となっている（帰国後に調査した「数字」である）。講談社の新刊が一八五〇点（二〇〇六年）であることを考えれば、その規模の大きさがわかるだろう。

もうひとつは、中国における出版状況の変化が、伝わって来る情報に比べはるかに急激であったことである。とくに体制改革、市場経済化に関する私の知識が旧態依然たるものであったために、浙江大学出版社・傅強氏が強調していた「企業」と「事業」の違いが判然とせず、レポートの真意が理解できなかったことは反省点としたい。当人に質問もしてみたのだが、国家の持ち物であるはずの大学出版社の資産を「登録」して（すなわち「私有財産化」して）大学が出資者となり、大学出版人は出版社の自律的な経営者となる、ということが本当に可能なのか、疑問として残ったままであった。

第12回ソウルセミナーに向けて

セミナーが終了し、帰朝してすぐの九月中旬に書協・国際委員会主催による講演会があり、中国出版科学研究所の辛広偉氏（"Publishing in China"の著者）からたいへん興味深い話を聞くことができた。さらに、『中国・台湾の出版事情』（島崎英威著、出版メディアパル）を読んで、ようやくながら中国側のレポートや、彭松建・中国大学出版社協会常務副理事長のセミナー総括あいさつの主旨をじゅうぶん理解するに至ったのである。余談ながら島崎本は初版二〇〇七年七月と最新の著書でもあるし、是非一読をお奨めしたい。また同シリーズには『韓国の出版事情』（舘野晳・文嫣珠著、初版二〇〇六年五月）もあり、併せて読めば来年のソウルセミナーの準備もできよう。

こうしたうえで第11回杭州セミナーを振り返ってみれば、内容的にたいへん豊かなものであったとあらためて総括できよう。第12回のソウルセミナー（主題①学術出版市場における大学出版部の位置付けと発展戦略、②三カ国大学出版部間の国際交流のための著作権実態分析）に向けては、まだ解決すべき問題もいくつか残っているが、三カ国の協力のもと、有意義な議論が再びソウルで交わされることを期待する次第である。

日本の大学出版部における組織運営形態

三浦義博（事務局長、東海大学出版会）

はじめに

二〇〇七年三カ国セミナー主題「出版部における管理体制プログラム」は、日本の大学出版部にとっても基本的課題であり、特定の大学出版部が個別的事例を発表するのではなく、日本の大学出版部の共通項を抽出し、国際部会としてレポートを纏めることにした。以下に発表することは、発表者の所属する大学出版部や発表者の個別的見解ではなく、概ね日本の大学出版部に共通する代表的類型を示すものである。

今、日本の大学出版部協会は加盟出版部が徐々に増加しているが、新加盟出版部の中には新たな設立形態を有している出版部もある。そのような状況も踏まえて日本の大学出版部における組織運営の実際をレポートしたい。

なお「管理体制プログラム」という表現は日本の大学出版部に必ずしも馴染むものとは言えない。中国大学出版社協会、韓国大学出版部協会に日本大学出版部協会の実情をより理解していただくためには、「設立の形態による組織運営」（もしくは「設立の形態による運営体制」）という表現が相応しいと思われる。そのような意味合いから、本レポートでは「管理体制」という表現ではなく「運営体制（組織運営）」という表現を使用する。

一　日本の大学出版部における組織運営体制を論じるにあたって

大学出版部の組織運営体制を論じるには、二つの局面から見る必要がある。

一つは、出版部の設立形態によっておのずから運営体制が異なってくるという局面であり、そこには国立大学系の出版部と私立大学系の出版部の異相という面もある。もう一つは、出版事業特有の機能を押し進めていった場合に生じてくる運営・管理の特殊性という局面であるが、これは

組織の規模と活動内容によって派生する個別問題である。

重要なのは前者である。日本の場合、大学はすべて二〇〇二年に法人化されたとはいえ、国立大学法人と私立大学の学校法人では、大学出版部を大学の「外」と「内」のどちらに設置するかに関して歴史的な経緯があり、国立大学では「外」に、私立大学では「内」に設置する傾向が一般的であった。

日本の場合、国立大学と私立大学の大学設置の法的基盤による、組織運営形態の違いなどにより、大学出版部の運営のトータル（機能）を画一的に論じることはできない。以下では、「出版部の設置形態と組織運営」、「組織運営体制の自立制、独立性」という二つの側面から、日本の大学出版部を概括し、最後に組織運営体制（組織図）のモデルを描いてみよう。

二　出版部の設置形態と組織運営

（i）　自主運営型

財団法人、中間法人、株式会社等の法人形態をとっている大学出版部が該当する。

資本（基本財産、基金、株式等）の母体大学からの独立性が保持されており、通常の運営業務を執行する出版部から法人役員が選出される。

しかし自主運営型といえども大学出版部である以上、代表者もしくは重要な役員は母体大学から派遣され、出版部はその監督下にあり、事業運営の実際、人事管理は出版部役員が代表者の了解を得て実質的に執行する。出版部個々の就業規則、賃金規則等を持ち、職員の採用・教育も独自に行う。ただし、財団法人や株式会社の事業全体の中の一部として出版事業が含まれている出版部もあり、これらはしばしば法人全体の経営方針に拘束される。

（ii）　共同運営型（学校法人出版部：収益事業部門）

私立大学系の出版部に多く見られる形態である。

「私立学校法第二十六条」に設立・運営の基盤を持ち、収益は「寄付行為」として学校経営に充てることが目的とされる。

学校法人が行うことができる収益事業の内、出版業は「情報通信業」に該当するとされるが「出版」という表記は無い。収益事業の規定には、大学として相応しくない事業は認められず、また大学の規模に見合った事業展開が求められている。

収益事業であるため、学校会計とは異なる一般企業会計として処理される。決算は大学本体の決算に含まれるものの、「消費支出計算書」とは別枠に「収益事業計算書」として公表されることが義務付けられている。

出版部を設立する大学は、

①　私立学校法第二十六条に基づいて収益事業を行うこと

② 収益事業部門として出版業を行うこと
③ 出版業を行うために出版部を設置すること
④ 出版部の収益は寄付行為として学校の経営に充てること

等を明記した学内規定（「出版会規定」）を設けて、出版事業を行う。

学校法人の出版部は、組織的には大学の一部局であり、出版部職員は大学職員であり、身分保障も人事異動も大学職員と同じである。大学の予算の一部によって事業が行われるが、事業運営にはある程度の自主性が認められている。

学校法人出版部は、財団法人、中間法人、株式会社等の上記「自主運営型」の出版部と比較して、母体大学との緊密な「共同運営」が組織運営の基本となる。

（iii） 大学運営型（学校法人出版部：補助教育事業）

同じ学校法人の出版部であるが、上記の「収益事業」とは異なり、収益を目的としない「補助教育事業」としての出版形態がある。平成十二年「文部省告示第四十号」の「第三条」に設立・運営の基盤を持つとされ、当該大学教員の研究成果公開、母体大学の広報的な位置付けを持ち、大学の社会評価を目的とする色彩も強く、著者は母体大学の教員に限定される。組織的には大学の一部門であり、専属の出版部職員を配置せず、他部署の職員が出版業務を兼務する場合もある。会計は、学校会計の中で処理される。

（iv） 国立大学出版部の新たな形態

国立大学の出版部は、財団法人が唯一の組織運営形態であったが（二〇〇五年度以降は中間法人が加わる）、二〇〇二年の法人化（大学法人）に伴って様相が変化してきた。「国立大学法人法第二十二条第五項」によって、大学の組織の中に出版部を設立することが可能となったのである。これは学校法人出版部の補助教育事業と、見かけは同じ形態をとる。収益を目的としない国立大学出版部であり、日本の大学出版部における新たな潮流と言える。その数は徐々に増えつつあり、二〇〇七年に大学出版部協会に三一番目の出版部として加盟した弘前大学出版会はこの形態である。

（V） その他の運営形態（任意団体）

任意団体は日本では「権利能力なき社団」といわれ、法令上の要件が不足して法人登記ができないか、登記を行わないために法人格を有しない形態の社団が該当する。

母体大学と合意形成の上で、とりあえず小規模な出版活動から始める場合には有効な設立形態であるものの、「権利能力を有していない」状況には自ずと限界があることは否めない。任意団体の出版部は、上記二の（i）～（iv）のいずれにも該当しないため、本レポートの議論からは対象外とする。

三　組織運営体制の自立制、独立制

以上の様に、日本の大学出版部は組織運営上、その内部に多様性を持っており、大学出版部の運営・管理を考える場合、どのレベルを問題にするかで、出版部間で違いが生じる。もし、職員一般に対してなら、法人であれ、大学の一部局であれ、それぞれに「就業規則」があり、また労働組合がある出版部ではさらに「労働協約」があり、これらを基に就業、および人事「管理」がなされる。これらの規則や協約は、ある面で標準化されている（労働基準監督署の下）。実態に差異はあろうとも、表向きは一律である。

三カ国セミナーの様子

おそらく、組織運営・管理の主体はだれか、と問うべきなのであろう。これはまさにその出版部の形態によって異なってくる。当然ながら、先に見たように設置形態＝自主性の密度によって違ってくるのであるが、ここではより単純化して二つのグループに大別する。

（i）　自主運営型

大学出版部が法人であって、運営が自主的・独立的である場合は、人事面も含めて管理体制は法人が独自に編成する。実際は、母体大学の理事や教員で構成される理事会のなかに、出版部職員代表が専務理事等として参加して実質的に理事会（執行機関）をリードし、その決定をもって、自主的に運営・管理体制を確立するのである。株式会社等の法人の場合は、その役員（取締役）等に母体大学の理事等の幹部が就任し、両者間で連携が図られる。

（ii）　共同運営型

管理・運営面から見るなら、事業の実質的な運営上の自主性を保持できる学校法人（私立大学）系の共同運営型も、人事面での管理体制は母体大学の管轄下にあり、事業運営面で自主性を保持できているものの、財団や中間法人、株式会社の大学出版部を「独立型」とするならば、「非独立型」とも言える。

四　大学出版部の組織運営モデル

自主運営型組織のモデルは、会長、理事長、理事の下に大学出版部の最高議決機関として理事会が構成されるが、事務局長（専務理事、理事）が大学出版部の実務部

門（職員）を統括する。

事務局内の部門モデルとしては、

【編集部門】編集総務部、領域別編集部（複数）、海外編集部、編集管理部

【製作管理部門】

【広告・広報部門】

【営業部門】営業総務部、領域・地域別営業部、特別販売部、教科書販売部、直接販売部、販売管理部

【経営管理部門】総務部、経理部、人事部

【コンピュータ関連部門】

となるが、日本ではここまで機能分化した出版部はほとんどない。規模に応じて、機能の兼務が行われているのが実情だ。最も一般的な組織運営上の形は、編集、営業、経営管理、の三部門までの機能分化であり、関連する業務はそれぞれがシェアすることになる。

おわりに

以上に見てきたように、日本の大学出版部は、設立の法的基盤をどこに持つかによって、見かけ上は同じように見えながらも、組織運営の方向性に微妙な差異があり、そのことが個々の出版部の活動に僅かながらではあるが、違いをもたらしている。しかし、この微妙な違いは「大学出版」という大きな枠組みの中では、見えない。大学出版部としての目的・方向性は同一であり、様々な組織運営上の課題を共有しているのである。

また大学出版部といえども、業としての出版は経済行為であり、収益は重要な課題である。補助教育事業としての私立大学出版部や国立大学出版部においてもそれは同様である。

「収益を目的としない」ということの真の意味合いは、商業出版社のような「利潤追求を目的とした出版活動とは異なる出版活動」が求められていることを意味している。①大学の研究成果の社会還元を目的とした学術専門書の出版、②大学の教育を補助するものとしての教科書出版、③専門知識の普及を目的とした教養啓蒙書の出版という、大学出版部の枠組みはここから派生してくるのであり、大学出版部の組織運営と管理運営の問題は、すべてこの立位置から発想し、大学出版の使命を全うする仕組みとして機能させることに本来の意味がある。

日韓中大学出版部の採算管理問題

後藤健介（東京大学出版会）

中国・杭州で行われた三カ国セミナーの第二主題は「大学出版部の原価管理と税務」である。ホスト国・中国大学出版社協会の提案でそのように設定された。この背景には中国の大学出版社の「企業化」（独立経営体になることを指す）改革がある。企業経営の根幹をなすと思われる原価＝採算管理と、税制（税金の制度だけさらっても仕方がないことなので、つまりは利益処分のことだろう）のありようを、市場経済の先輩格である日本と韓国の大学出版部に取材しようとしたのだと思われる。

一　杭州セミナーでの日本側の発表

これに応える日本側の発表は、第一主題と同様、［日本］大学出版部協会国際部会での合同作業で準備された。昨年度の国際部会長・小野利家氏（京都大学学術出版会）は、「日本の大学出版部における平均的な原価管理政策」および「日本として特色があろう税制・税制運用（単行本在庫調整勘定など）」の二つの論点で原稿を作成、部会として多少の付加をしたものを、取りまとめ役の筆者が（この方面には不案内ながら）杭州で発表することとなった。

発表の前半では、企画の特性に応じた採算管理を「コスト・プラス方式」と「プライス・ライン方式」に大別して紹介し、そこに東京大学出版会における間接経費の反映政策を注の形で補足した。補助金の有無など、採算管理の実際にあたってはさらに考慮すべき点は多いが、これらの変数は各出版部および各書目の経済的規模や「使命」に応じて、戦略的に運用されるものであることを強調した。

後半では日本的な制度として「再販売価格維持制度」と「単行本在庫調整勘定」の二点を紹介、最後に、租税納付と利益処分も社会的還元に位置づけ、発表全体を、大学出版部の持続可能性の実現は社会的責任である、というような論旨で閉じた。

二　「企業化」する中国の大学出版社

中国側が何を発表するかは私の関心事であった。登壇したのは陸銀道氏（北京大学医学出版社）、題名は「大学出版社が財政・税務管理を通じて経営管理レベルを向上」である。直ちに推測されるとおり、市場競争における財務管理・予算管理の重要性を一般論的に指摘したものであった。翻訳の問題もあり発表当日には理解しがたい点もあったのだが、ここでは、もう少し陸氏の発表を詳細に見てみよう。

驚くのは「［独立した］採算管理を採用している大学出版社は中国ではいまだ非常に少ない」という指摘である。ではなにを経営の主要な指標としているかについては不明だが、社会主義経済の一般的理解から、おそらく生産目標とその達成であろうと思われる。このことは、発表中の「発行部数を販売部数のことだと誤解すべきではない」というくだりなどにもうかがえる。中国で出版経営の外枠を規定するのは本をどれだけ出すかであり、それがどれだけ売れるかではないのである。

改革開放政策から最近まで、こうした状況は大枠で変わりないながら「企業」的な経営をするという折衷的状況であったという。[1] しかし中国側の第一発表によれば、今年の四月より政府の教育部（日本の文部科学省に相当）と言論機関統括機構（中国新聞出版総署）とのイニシアチブで、中国大学出版社で体制改革が試行されることとなった。[2]「企業」化する大学出版社は、従来の考え方とは彼らにとって真逆の方向で、すなわち市場の需要によって生産を定義することになる。この「市場性」をどうとらえるかは世界どこでも大学出版部の重要な論点になるが、それについて、「大学出版の根本は学術出版である」べきだと発表の冒頭で主張する陸氏は、「我々大学出版部はここ数年……学術書の刊行は行いながらも、より大きな精力を市場の拡大と利潤の増大においてきた」と現状批判する。学術出版市場の調査もなく、ろくな採算設計もせず、「特色図書」（昨年までの中国側発表に頻見された表現）を出したら売れたのブーミングにのってきたのが、ここ数年の中国の大学出版社の姿なのだろう。[3] 今回の体制改革を経て、市場競争をおのれの使命を顧みる機会とし、独立採算的に持続可能な経営をおこなう転機とすべきだというのが、陸氏の主張であったと思われた。

では中国の出版業界における競争とはなにか。出版社間の価格引下げ競争、書店での割引販売の過熱を陸氏は憂慮しているようだが、果たして市場にはどんな敵が現れるのか、まだそれが見えてこない。いきおい論点は出版社内のコスト削減策に移ることになる。

陸氏の発表では、刊行書目の経済性の吟味と市場調査、一括仕入れなどによる直接製造原価の圧縮、職員のコスト意識の共有と一人当たりの生産性を向上させる（つまり従来のように人員を増やすことなく生産高をあげる）ことと、

そのためのモチベーション政策の重要性を指摘する。

その他にも、インターネットでの情報提供や電子媒体をだきあわせにして書籍の付加価値をあげる、シリーズものを刊行して書店に常備させることにより出版社在庫を減らす（?）などの提案もあったが、興味深いのは納税に対する姿勢である。陸氏は、税はただ仕方なく取られるものではなく、採算管理努力の重要な論点として考えるべきであるとし、堂々たる節税論を展開する。利益は自社に投資して経費として計上、節税し、競争力を向上させることが、企業財産として預かっている国有財産を殖やすことになるのだというロジックは、中国の税務署は困るだろうが、社会主義市場経済における経済の公共性のダブルバインドをよく物語っているようにも思われる。

なお、韓国からはソウル大学出版部の李圭一氏が「大学出版部と企業会計」と題して発表した。従来韓国の大学出版部は、いわゆる「アメリカ型」――大学の予算を計画性をもって執行し非営利的な出版活動をおこなうもので、書籍の売上で独立的に再生産する「イギリス型」と対置される――に類するものと思われていた。だが、近年の韓国における大学と大学出版部の法人化を経てか、李圭一氏の報告は用語や運用の細部において差異はありながらも、日本側の意識と実務によく対応するものと思われた。

三　「共通性」の確認から、そのむこうへ

第二主題における三カ国の発表は、日韓の共通性に比べて中国との距離はなお残るものの、大きな視点にたてば「よく似た発表」であったとも、私には思われた。原価＝採算管理の問題は、各国国内の各大学出版部でも発想・運用が異なるものであり、また出す本ごとにもバリエーションがあるようなものであろう。今後も三カ国セミナーのみならずあらゆる機会で語られるべき論点ではあるが、それを具体的な戦略論ではなく、国際的に論じようと一般化してしまえば、発表は果てしなく「大学出版社が財政・税務管理を通じて経営管理レベルを向上」の一文だけに近づいてゆき、あとは様々な経営・会計上の共通の原則と、相互には分かりづらい個別事情が残るだけとも思えた。

今回のセミナー第二主題では、韓国にくわえ中国の大学出版社も、日本と大枠として同様の経済的観念をもちつつある事実を確認したことを収穫としたい。そして三カ国の大学出版部の「共通性」を確認をするとともに、今後「そのむこう」の課題に取り組むことがもとめられよう。

たとえば、①現在財団法人の法人格をもっているいくつかの日本の出版部は、公益法人制度の改革後に、どのようにこの問題を論じるか。「収益事業」の出版と「公益事業」の出版などというものが分別できるものだとすれば、それぞれどのようにコスト管理され、持続的に資金調達される

のか。これは中国の「事業」系大学出版社にも示唆を与えるだろう。

②電子媒体との関係において、この議論はどう変化するか。電子辞書の普及期、辞書をもつ日本の出版社では、そのコンテンツ販売によって過去最大の利益をあげたところもある。しかし、大半がハード製作側主導で行われた事業であり、多くの出版社にとってそれは単年度の突発的収入でしかなく、その後出版社側が継続的に電子コンテンツの開発・販売を事業に位置づけ独自の採算設計を有するにいたった例は少なかったと思われる。日本の大学出版部でこうした辞書・事典コンテンツを持っているところは少ないだろうが、たとえば「ネット・ライブラリ」や「レポジトリ」に電子データを提供する際の「対価」の問題はどうか。電子情報インフラの普及により、大学による研究の公表（university publishing）の方途が次第に大学出版（university press）外の領域に展開しつつあるが、その主体は大学当局や大学図書館などであり、大学出版部は協力を期待されながらも対価は保証されていない。現在はまだ細々とした流れではあるが、この傾向は必ず構造化し、書籍の販売にも何らかの影響を及ぼす。良い影響も考えうるが、なににせよこの損得勘定には、ほぼ手が付けられていない状態ではないだろうか。

上記は私の思い付きをただ並べただけであるが、我々日本の大学出版部がいま直面している問題こそ、「共通性」の確認以後に三カ国セミナーで研究・議論されるべき問題の有力な候補だろうと私は考えている。特に後者の電子化の問題については韓国・中国の大学のほうが事態が進んでいる可能性も大きく、日本に大きな示唆を与えることもあるだろう。

韓国や中国と比較して、日本の大学出版部（ないしは大学行政、出版業）が先進的だと思える場面は、ここ数年急激に少なくなってきた思いがある。もし我々日本側になんらかの先進性があるとすれば、我々自身がこの日本でぶちあたっている問題の構造を明らかにして両国と分かつことにしかない。そのように思えた発表であった。

（1）同発表によると、それでも大学出版社のような教育機関が運営する「企業」の税金は免除され、書籍によっては付加価値税相当分が還付された、という。

（2）「企業」として体制を改革する社では、自社が所轄してきた国有財産の確定と精算をおこない、それを自社の企業財産に登記し、薫事会（理事会、取締役会などに相当）など経営組織をととのえることとなる。改革中の社には税金が減免され、諸資源の割り当てには優遇を受けるという。一方で「事業」にとどまる大学出版社は、非営利的な別形態をとることになるようだ。

（3）なお、中国の出版業界において大学出版社はしばしば大手出版社である。概況については島崎英威『中国・台湾の出版事情』（出版メディアパル、二〇〇七年）を参照。

【座談会】

ブックフェア「ナチュラルヒストリーの時間」を振り返って

出席者
矢寺範子（ジュンク堂書店池袋本店自然科学担当）
稲垣美穂（ジュンク堂書店池袋本店自然科学担当）
稲　英史（東海大学出版会編集課）
光明義文（東京大学出版会編集部）
写真撮影　唐澤幹雄（早稲田大学出版部営業課）

大学出版部協会では、本年六月から九月に掛けて、自然史の愉しみ、自然科学書の魅力に触れていただくブックフェア「ナチュラルヒストリーの時間」を全国二一の書店で開催いたしました。また、フェアに合わせ、ナチュラルヒストリーの拡がりと奥行きをコンパクトに、分かりやすくお伝えするブックレット『ナチュラルヒストリーの時間』（大学出版部協会編、定価一六八〇円）を刊行いたしました（二一頁参照）。

このたび、フェアを推進してくださいましたジュンク堂書店池袋本店の矢寺様、稲垣様をお迎えし、フェアおよびブックレットについて、また自然科学書の現状と未来について語り合う場を設けることができました。熱い座談会の模様をどうぞお楽しみください。

ナチュラルヒストリーについて

稲　大学出版部協会のブックフェアに協力していただきましてありがとうございました。今日は二カ月間にわたって開催していただいたブックフェアに関してお話をいただければと思います。

矢寺　とてもよかったと思います。時期も夏休みの時期でよかったし、私どものお客さまだけではなくて、普段、ナチュラルヒストリーに縁がないような方やお子さんもけっこうご覧になられていましたし、たいへん反響があったフェアだったと思います。

稲垣　いつもは理工書のフロアにいらっしゃらないようなご家族連れの方たちが夏休みということでたくさんいらっしゃいましたし、予想以上にお子さんが多かったのが印象的でしたので、これを機会に自然に興味を持ってくれるお子さんが増えたらいいなと思います。すごくいいフェアだったと思います。

稲　ありがとうございます。

光明　お子さんたちがナチュラルヒストリーのフェアをきっかけにして自然に興味を持ってくださったとしたら、少なくともその点ではテーマとしてよかったのかなと思って、ちょっとほっとしてます。

矢寺　でも大きなテーマだったので、最初どうしようかと思って二部構成にしたんですけど、そのあたりのことは稲垣がすごく考えてやったんです。

稲垣　私、恥ずかしいことに最初、ナチュラルヒストリーってなに？　というところから始まったんです。講談社学術文庫にある日高敏隆さんの『帰ってきたファーブル』の第一章にナチュラルヒストリーについて書いてあったんですよ。それでなんとなくつかんだんですけど、ほんとに広くて。でも広ければ広いだけやりがいがあるなというか、こちらが好きなようにテーマを設定して絞っていけるので、それは本を選んでいてとても楽しかったです。限られたフェアですし、広いテーマなので、できるだけたくさんの本を置きたいということで二部構成にしました。第一部「生物の多様性を読み解く」と第二部「地球の歴史を読み解く」の分野分けについては稲さんと光明さんにご意見をいただいたりして、うまくいったなと思っています。

稲　確かにナチュラルヒストリーは広くて、よくわからないところがあるんだけど、日本のなかで正しく位置づけられていないところがあって、その人その人によってずいぶん理解が違うと思うんですね。今回のナチュラルヒストリーというのは、自然のなかでの遊びの部分というか、子どものころに自然のなかでこういうことを体験した、というところから始まったんです。

光明　ナチュラルヒストリーの定義を調べると、いろいろあります。われわれもさまざまな視点からナチュラルヒストリーをとらえようと考えました。だから、第一部と第二部のいずれも少し漠とした感じがあったんじゃないかなと思います。第一部と第二部を比較した場合に、お客さんの違いみたいなものはありましたでしょうか？

稲垣　時期的なものもあったと思うんですけれど、前半のほうは夏休みの課題を探している方たちがいらっしゃって、図鑑などを見ていらっしゃった方が多かったように思

います。後半になるともうせっぱ詰まっているので、これからこれを読んだら遅いよねというような話も聞こえてきました。また、後半のほうは年配の鉱物ファンの方がたくさんいらっしゃっていたかなと思います。意外だったのは、第一部と第二部を通して女性が多かったですね。

光明　普段、ジュンク堂さんの七階（理工書のフロア）は女性のお客さまというのはあまり多くないですよね。

稲垣　少ないですね。数えるほどです。

ジュンク堂池袋本店の理工書担当の矢寺範子さん(左)と稲垣美穂さん(右)

矢寺　女性の方はお連れさまで来るくらいですね。

稲　そうか。女性がやっぱり少ない。

稲垣　そうですね。

光明　書き手にも女性はやっぱり少ないんです。たとえば生物の分野だと、実験系では女性の研究者もかなりいるんですけど、フィールド系ではまだまだ少なくて、それに伴ってか、女性の読者も少ないようです。でも、最近はフィールド系の分野では、男性よりも女性のほうがアクティブで優秀な大学院生が多くなってきたということをいろんな大学の先生方からよく伺うので、あと何年かするとむしろ女性の研究者のほうが増えてくるかもしれませんね。

大学出版部協会の本

稲　今回のブックレット『ナチュラルヒストリーの時間』というのは大学出版部協会ではじめて出版した本ですが、いかがでしたか？

矢寺　あれはよかったと思います。

光明　売れ行きはどうですか？

稲垣　いいですね。いま五〇部は超えたと思います。

光明　一章あたり四～六ページで、一本ずつ読めるような仕立てになっています。どこから読んでもおもしろく読めるというような紹介記事もいくつか出ていますね。

矢寺　豪華執筆陣で、おもしろく読みました。さらっと読んでも興味を持った方がいると思います。

光明　自然科学のフロアを担当していらっしゃるお二人として、こんなテーマの本があったらいいなというものがあったら、教えていただけますか？

稲垣　ときどき、お客さまからこういうジャンルの本は

ありますかというお問い合わせを受けて、あ、そういえばこういう本はないなというのはあります。

光明　自然科学だと、たとえばブレインサイエンスの分野はさまざまな出版社からいろんな本が出ていて、かなり層も厚いと思うんですね。それに対してナチュラルヒストリーの本は、総量としてはそんなに多くはない。でも、じつはけっこうおもしろいテーマがあるんじゃないかなという気がしています。

稲　気がつかないということもあるんだけど、なかなかつくれないものもあるんですね。

矢寺　ジャンルでいったら、恐竜と天文は日本のきちんとした本は弱いですよね。

光明　確かに恐竜はそうですね。夏休みにあれだけ企画展がいっぱいあるにもかかわらず、専門書というのはほとんどない。

稲　確かにないし、われわれもつくってないですね。

光明　天文もそうなんですか？

稲　製作面からいえば、天文も図版の処理が難しいところがあります。恐竜の場合は、迫力があり、かっこいいイラストが必要になる。専門書にカラーを多用するのは限界がある。

光明　恐竜の場合、恐竜図鑑みたいなビジュアル系のが多いじゃないですか。そういうのは売れますか？

稲垣　売れることは売れますね。

稲　カラーはコストもかかるし、レイアウトも工夫やアイデアが必要になる。われわれが苦手にしているところですね。でも売れるでしょうね。けっこうおもしろいテーマもあるのですが、コストの面で引いてしまう。恐竜とか宇宙・天文は、学術図鑑とは違うし、類書との比較も必要ですし、大学出版部では、おそらく部数や定価設定が読めないんじゃないでしょうか。だから、おもしろいテーマですけど、われわれにはなかなかできない。これからチャレンジしたいところではあるのだけれど。

光明　恐竜の研究者は比較的若い世代で海外で学位を取って戻ってきた優秀な人たちがいるので、翻訳書ではなく日本の研究者に書いてもらったほうがおもしろいのができるような時代になってきたかもしれない。

稲　われわれがつくっているのは大きく学術書、教科書、教養書に分けられますが、それぞれについてなにかご意見などはありませんか？

矢寺　いや、もともと私たちは全部専門書だと思って棚づくりをしているので、そんなふうに分けては考えないんですよ。強いて分けるとしたら、教科書と学術書ですかね。

稲　われわれが教養書としてつくっていても、専門書として区分けされているということですね。教養書として棚に入れていただくのはなかなか難しい。

光明　たとえばこれは学術書、これは教科書、これは教養書というラベルが貼ってあるわけじゃないんで、あくま

でもどういう方が読んでくださったかによって、これは教養書的な売れ方をしたな、これはやっぱり専門の研究者じゃないと読めなかったなと、実際は結果から判断していくしかない。

唐澤　営業の立場でいうと、「大学」の出版部というイメージが、販売にどう影響するのかということですよ。こちらががんばって教養書だといっても、やっぱり専門書としてとらえられてしまうというようなこともありますよね。たとえば書店の方が専門書として棚に入れてくださる場合と、教養書と一緒に並べてくださる場合では、それによっても色づけが変わってくるような場合もなかにはあると思うんです。

大学出版部協会ブックフェア「ナチュラルヒストリーの時間」。ジュンク堂池袋本店の理工書フロアで国立科学博物館の協力を得て開催

それから専門書は出てすぐ評価され、書評に出て、ぱっと売れるというような性格のものではなくて、比較的長い期間にわたって評価されます。たとえば一年後に学会誌に取り上げられて、専門の方々が棚に探しに来るということもある。でもそのときはもう棚にない、ということがあるんですよね。それでいきますと、ジュンク堂さんはものすごく辛抱強く置いてくださるのでとてもありがたいと思います。

稲　大学出版部協会から新刊が出たときに、その情報をどのようにして得ていらっしゃいますか？

矢寺　やっぱり、それぞれの新刊案内ですね。

稲　大学出版部協会のホームページってご覧になったことないですか？

稲垣　フェアが始まるときに一回拝見しましたけど。

稲　一回ですか。

稲垣　すみません。

唐澤　要は、こちらから発信しないとなかなかウェブ・チェックはできないということですね。

稲垣　そうですね。

稲　それから、大学出版部協会で「新刊速報」というのを出していますが、あれはご覧になりますか？

矢寺　いえ、まったく知りませんでした。

唐澤　「新刊速報」は、図書館や書店の外商向けにつくっています。大学出版部協会のその月に出た本を翌月の第

一週くらいにペーパーで送ってるんですよ。ですから、これは前月に出た本の情報ですね。でも、これは外商向けだからなかなか店頭に出ないというのが現状かもしれませんね。

稲　あれって、どうして外商向けなんですか？

唐澤　大学出版部協会の営業活動として大学図書館の蔵書をチェックして、オーダー漏れを注文してもらおうということから始まりました。だから、これから出る本ではなく先月出た本をチェック用に発行しています。

書店からのリクエスト

稲　われわれ編集サイドに要望みたいなものがあれば教えていただきたいと思います。

矢寺　編集サイドしかわからない情報というのがあると思うんですね。著者がらみの話とか、著者同士のつながりとか、そういうのがあれば情報としては欲しいと思います。そういう情報を編集者の方からいただけたらありがたいですね。

稲　今回のブックレット『ナチュラルヒストリーの時間』にもいろいろなつながりがあります。僕と光明さんは編集者同士のつながりですし、執筆されている著者たちのつながりもすごく濃いものがあったりして、確かにおもしろいんですよ。たとえば、ある学会の会長と副会長だったというのもありました。

矢寺　これからもそういう情報を教えていただけたらすごくありがたいです。

光明　われわれ編集者ももっと書店さんに足を運んで、担当の方と話をしないといけないと。そういうことをご指摘いただいたんだというふうに肝に銘じておきたいと思います。行かねば行かねばと思いつつ、書店さんに行く回数が、まだまだ全然少ない。読者の方と直接接していらっしゃるのは版元の営業じゃなくて、書店さんじゃないですか。だから書店さんから直接いただける情報というのは、いろんな意味でわれわれの編集活動にとっても役に立つので、もっともっと足を運ばないといけないと思います。

稲　そうですね。本をつくっているとけっこう気になるのが書名や装丁で、それを一堂に見られるというのは書店さんなので、非常に勉強になります。これからもよろしくお願いします。

稲垣　今後ともよろしくお願いします。

光明　矢寺さん、稲垣さん、今日はどうもありがとうございました。そしてカメラマンとして参加していただいたのに、対談にも加わっていただいた唐澤さん、おつかれさまでした。

―了―

ナチュラルヒストリーの時間

大学出版部協会編　A5判／160頁／定価1680円

自然史へ誘う：博物誌から生態学、多様性生物学、ゲノムサイエンス、そして21世紀のナチュラルヒストリーを愉しむ

I. Prologue of Natural History

第1話　自然を記録すること……斎藤靖二

第2話　自然史と本……青木淳一

第3話　日本のナチュラルヒストリー……岩槻邦男

コラム①　動物写真の世界

II. History of Nature

第4話　ノーチラス号が遭遇した大ダコ……奥谷喬司

第5話　マリー・ストープスの2つの顔：日本の植物化石研究事始め……矢島道子

第6話　京都の語り部：深泥池……竹門康弘

第7話　遺跡の土に秘められた情報……松井　章

コラム②　ききみみずきん

第8話　遺体で動物学を埋め尽くす……遠藤秀紀

第9話　ダーウィンと魚類学：人々と時代と魚たち……武藤文人

第10話　日本の小鳥飼育文化と鳴き合わせ……小山幸子

III. Diversity of Nature

第11話　サクラソウとマルハナバチ……鷲谷いづみ

第12話　日本列島に人間と野生動物との共生の歴史をさぐる……湯本貴和

第13話　琉球列島の自然史……太田英利

第14話　マンボウと標本……松浦啓一

第15話　分類学事始め：タクソン，タイプ，名前……馬渡駿輔

コラム③　サルにノミはいない？　幻の定説

IV. Story of Nature

第16話　クマ大量出没の謎……大井　徹

第17話　ふしぎの国のアリ巣……丸山宗利

第18話　現代によみがえったインカ時代の狩猟……山本紀夫

第19話　子どもたちと自然教室：干潟で役立つ本や教材……古賀庸憲

第20話　熱帯雨林の林冠アリ……市岡孝朗

第21話　殿様の自然史……松岡明子

第22話　幻のロバと男たち……木村李花子

第23話　食の博物誌：多民族国家のハイ・ティー……周　達生

コラム④　アリジゴクの自然史

V. Epilogue of Natural History

第24話　遺伝子を通した動物との対話……村山美穂

第25話　ゲノム時代のナチュラルヒストリー……西田　睦

コラム⑤　小・中学校図書館は今

特別寄稿：「具体的な人間の日常性」と抽象化された「専門性・科学性」……久塚純一

自然史文献リスト

大学出版部ニュース

二〇〇七年度夏季研修会

八月二三日～二四日、「かんぽの宿浜名湖三ケ日」において二〇〇七年度大学出版部協会夏季研修会（当番校・専修大学出版局）が開催された。講師二名を含めた総勢六五名の参加。研修会の主なスケジュールは次の通りであった。

【八月二三日】

①基調講演「出版業界の現状と大学出版」（木下修：杏林大学客員教授）

②ケーススタディ：玉川大学出版部（成田隆昌）

【八月二四日】

①四部会（営業・編集・電子・国際）共通編集ケーススタディ：「タウトが撮ったニッポン」（報告・平井公子、武蔵野美術大学出版局、招待講師・酒井道夫、武蔵野美術大学教授）

②パネルディスカッション：「今、大学出版を考える」（コーディネーター・三浦義博、東海大学出版会）

二〇〇七年度夏季研修会はテーマ型研修会「今、大学出版部を考える」であった。基調講演、四部会共通編集ケーススタディ、パネルディスカッションを通して、このテーマは一貫して流れていたように思える。

杏林大学の木下先生の講演は事前に資料「日本の出版市場の変化」「日本の書店の現状と経営課題」が配布されていたこともあり、スムーズに進んだ印象を受けたが、「大学出版部とは何か、を考えると、何が違うのかがよく判らない。ほんの少しの違いが大学出版部なのだろう」という発言は印象に残った。

二日目に開催された協会初の試みである、「四部会共通編集ケーススタディ」のネタは武蔵野美術大学出版局の『タウトが撮ったニッポン』であった。報告者であるムサビ平井さんの同書刊行までの経緯は（私など）「遠い昔に置き忘れてきた編集者としての何か大切なもの」を思い出させてくれる報告であった。脇でニコニコしながらその話を聞いておられた著者（編者）酒井先生と編集者との蜜月の関係は、また微笑ましくも羨ましいものであった。

北海道大学出版会

▼川口暁弘著**『明治憲法欽定史』**（A5判・六五一〇円）憲法第4章（第55条国務大臣、第56条枢密院）の成立過程に着目し、伊藤博文と井上毅を中心に明治14～22年に至る憲法「欽定」作業を詳述。明治政治史の全体像を構築。▼望月哲男編著**『創像都市ペテルブルグ』**（A5判・二九四〇円）ピョートルが「ヨーロッパへの窓」として開いたペテルブルグを歴史、科学史、文学など多彩な側面から読み解く。スラブ・ユーラシア叢書2。▼木村汎・袴田茂樹編著**『アジアに接近するロシア』**（A5判・三三六〇円）現情勢下のロシアのアジア政策の推移と変化を四部構成でテーマ別に精緻に分析。ロシアとアジアの協力関係の新構築をめざす。▼川口琢司著**『ティムール帝国支配層の研究』**（A5判・七五六〇円）テュルク系支配層について、①ティムールの後継問題とシャールフ政権成立のダイナミズム、②宮廷史家によるテュルク・モンゴル伝承とモンゴル帝国史の創造、③部族・グラーム出身のアミールと政権の本質・動態との関わりを解明。政権の質的変化や政権交代のダイナミズムを描き出す。

弘前大学出版会

当会は国立大学法人化直後の〇四年六月に全国初となる国立大学法人の学内組織として発足した。その後比較的順調な出版活動を経て設立三周年を迎えた本年、大学出版部協会に加盟することができた。▼**『未踏峰に挑む―弘前大学カラコルム遠征隊1984の記録』**弘大カラコルム遠征1984実行委員会編（A4変型判・二二〇五円）一九七二年から約二五年の間に弘前大学は次々とヒマラヤの山々の初登頂、初登攀を成し遂げ、本書はそのうち一九八四年未踏峰ユクシン・ガルダン・サール峰（7,530m）の南西壁初登攀成功の記録である。▼シリーズ**「弘大ブックレット」**は当会からの「知」の発信、かつ、社会に向けての「問題提起」の書として〇六年九月創刊された。No.1**『転換の時代の教師・学生たち-青森師範学校・弘大教育学部祝辞・答辞集』**佐藤三三・星野英興編著（A5判・五〇四円）No.2**『青森県のフィールドから―野外動物生態学への招待』**佐原雄二編A5判・五二五円）No.3**『Dr.中路の健康医学講座―寿命を読み解けば健康が見えてくる』**中路重之著（A5判・三七八円）

東北大学出版会

▼藤原松三郎先生数学史論文刊行会編**『東洋数学史への招待―藤原松三郎数学史論文集―』**（B五判、四五三頁、四二〇〇円（税込））明治初期、わが国の数学は西欧方式のカリキュラムが採用されたため、当時世界に比肩する水準にあった東洋数学は学会・教育界から忘れ去られる運命に瀕した。これを後世に残すべく、創立時の東北大学は資料の調査・収集に当たった。本書所蔵の講演録は、この方面の絶好の入門案内であり、また諸論文は東洋独自の数学的思考の発展過程を解明する基礎資料として必須のものである。▼磯部彰著**『『西遊記』資料の研究』**（B五判、四九七頁、五六七〇円（税込））『西遊記』の歴史は古く、唐初の伝説に由来する。それから約千年、伝説から簡単な語りもの、そして挿絵入りの長編小説へと変貌し、人々を魅了し続けてきた。本書は、『西遊記』に関する資料を宋代から明末清初まで整理し、敦煌出土絵画や絵巻、屋根の飾り瓦等貴重な資料を紹介しつつ、豊富な図版を用いながら『西遊記』の発展の足跡をたどった研究書である。

流通経済大学出版会

▼早川　修著**『大学生諸君！今求められる問題解決力』**（四六判・一六二頁・一二六〇円）一般に、問題解決力はビジネス分野で扱われる。しかし、現代の大学生に内在する安穏症候群の払拭と厳しい競争社会を生き抜く原動力として、在学時に「問題解決力」をつけることが大切であることを説く。▼角本良平著**『世界の鉄道経営「今後の選択」―わが体験的（二十一世紀）鉄道論―』**（A五判・二〇四頁・三〇四五円）二十一世紀において鉄道をめぐる諸条件は必ずしも好転はしない。しかし、鉄道経営を絶望に陥れる状況ではない。永続できる可能性を賢明に生かしていく経営が望まれる。▼若林宏明著**『安価な石油に依存する文明の終焉―蘇る文明と社会―』**（A五判・三八二頁・三五七〇円）エネルギーの概論に始まり、縮小する世界の石油資源状況、原油獲得に伴う世界紛争・テロ攻撃等の背景、並びに終焉に近づく石油文明の姿を浮き彫りにした。石油に依存してきた文明は、結局石油資源の減退とともに、国際経済や社会システムに関する認識を変えざるを得ない。

聖学院大学出版会

▼標　宮子『**「とはずがたり」の研究**』（A5判上製、十一月刊行予定）

『とはずがたり』は一九三八年に宮内庁図書寮で発見され、埋もれた古典として話題になった文献であるが、それ以降、多くの研究者によって執筆年代の確定など地道な注釈研究がなされてきた。本書は、それらの成果を踏まえながら、これまでの研究の問題点を明らかにする。そして作品の背景である宮廷貴族の生活を解明し、主題となっているさまざまな宮廷の人間関係の中で苦悩する著者の生き方を現代に甦らせている。

著者は「『とはずがたり』は虚構性がつよく物語文学のジャンルに位置づけられるべきである」という説に対して、『とはずがたり』の著者自身の固有性へのこだわり、自己をみつめ、真実を追求するその表現から日記文学に位置づけるべきであると問題提起をしている。

本書は、学位論文として提出された研究に詳細な文献と索引を付したもので聖学院大学学術研究叢書の第五巻として刊行されるものである。

聖徳大学出版会

▼既刊「心と身体の癒しシリーズ」

第一巻『音楽療法を語る』――精神医学から見た音楽と心の関係

村井靖児著／四六判／上製本／二八〇頁／定価二一〇〇円

「新しい音楽療法技法を作ることに強い関心があるし、そのほかにも、音楽療法の基礎になるような、心の問題、音楽の問題、音楽と心の関係などについて、考えたいと思っている。」と著者は語る。本書では、音楽療法の第一人者である著者が音楽療法の理論、心身と音楽との関係を解き明かす。

第二巻『医における癒し』――人間関係の形成のなかから

森彪著／四六判／上製本／二八〇頁　定価二一〇〇円

本書は「医療には、そのベースに人間関係への信頼がなければ真の医療とはいえない」と語る著者が、実際の医療現場で実践し経験を基に人間的な眼差しで書き下ろされたものである。

▼**『親子で楽しむ唱歌集』**（CD　三四〇〇円税込　二枚組　全四二曲　女声アンサンブル）

麗澤大学出版会

▼井上一馬著『**英語丸のみ辞典**』「日常会話篇Ⅰ　身のまわり・人づきあい」（二三一〇円）「日常会話篇Ⅱ　生活・仕事」（二五二〇円）「ビジネス英語・ニュース篇」（二九四〇円）英語は、この本（トリオ）だけでいい。日本語→英語の順で、ムリなく、ラクに「英語脳」をつくる逆転の学習法。英語の達人・井上一馬が編んだ単語・熟語・例文集。

▼小林道憲著『**複雑系の哲学――21世紀の科学への哲学入門**』（二三一〇円）「科学」と「哲学」の対話を通した新しい世界観の展開。科学研究者のために、自己組織化理論やカオス理論に源泉をもつ「複雑系の科学」の哲学的基礎を与える試み。

▼田中治郎著『**先人に学ぶ生き方―伝えていきたい日本の30人**』（一六八〇円）

『英語まるのみ辞典
日常会話篇Ⅰ』

慶應義塾大学出版会

▼京極高宣著『**社会保障と日本経済**』（総合研究　現代日本経済分析1）（三九九〇円）膨大なデータを基に社会保障政策の多様な経済効果を明らかにし、二一世紀日本経済の針路として「社会市場」の創造と成長を提唱する革新的著作。

▼権丈善一著『**医療政策は選挙で変える【増補版】―再分配政策の政治経済学Ⅳ**』（一八九〇円）医療・年金問題を中心に論じた話題のウェブエッセイを書籍化。大反響に応えて【増補版】緊急刊行。

▼ネルソン&ウィンター著・後藤晃他訳『**経済変動の進化理論**』（五八八〇円）「進化理論」を基に経済・社会のダイナミックな変動解明の理論を構築し、社会科学の新しいプラットフォームを提示。

▼新倉俊一編『**西脇順三郎コレクション**』（全六巻、合計三一五〇〇円［分売可］）詩人・西脇順三郎（一八九四～一九八二）の没後二五年を記念して、いまなお多くの文学青年たちを虜にする珠玉の詩、翻訳詩、評論、エッセイを精選。永遠のモダニストのエスプリと博学多才な知識が織りなすコレクション。一〇月、全巻完結。内容見本贈呈。

ケンブリッジ大学出版局

▼Climate Change 2007-The Physical Science Basis (Paperback 9780521705967, USD 185.00)

気候変動に関する政府間パネル（IPCC）が六年毎に発表する「IPCC第四次評価報告書」第一作業部会報告書が九月に出版されました。十一月には第二、第三作業部会報告書が出版される予定です。

▼Numerical Recipes 3rd Edition (Hardback 9780521880688, USD 80.00)

新たに二つの章と二十五セクションが加わり、第三版増補版としてアップデートされました。四人の著名な研究者により、基本的な数学、コンピュータサイエンスから実際のコードまで読みやすくまとめられています。さらに、C++コードがカラーで表記され見やすくなっているのも特徴です。

産業能率大学出版部

▼坂本裕司著『**ホワイトカラーの生産性を飛躍的に高めるマネジメント**』（二二五二〇円）

ホワイトカラーをマネジメントする技術が欧米から導入されてきたが、これまで日本市場には必ずしも有効な功績を残せていない。これからの日本企業の命運はホワイトカラー（知識労働者）の生産性にかかっている。

本書は、企業躍進の鍵を握るホワイトカラーの生産性を向上させる画期的な実践マニュアル書。

▼高橋修・松本桂樹著『**活き活きとして職場をつくるメンタルヘルス・マネジメント**』（二一〇〇円）

本書は、「業務多忙な管理職」という実態を踏まえて、メンタルヘルス・マネジメント活動を期首（Plan）→期中（Do）→期末（See）という日常のマネジメント・サイクルの中にうまく組み込むための具体的な方法について言及している。

☆大阪商工会議所主催「メンタル・ヘルスマネジメント検定」受験参考書としても最適。

専修大学出版局

▼中野育男『**スイスの労働協約**』（三九九〇円）グローバリズムが席巻する中、EUに加盟していないものの四囲を加盟国に囲まれているスイスの、変貌著しい集団的労働関係規制に焦点を当て、使用者団体と労働組合との間で締結されるスイス労働協約の法理論的特質を究明する。その今日的情況も分析。

▼毛利豊史『**西行の思想―自意識と絶対知**』（三三六〇円）西行の思想を主体内部に即しつつ、その輪郭に関する搦め手からの概念的構築を試みる。そうして自意識の根本的関心が向かうべき、且つ倫理思想史としてのあるべき辿りの実質が俯瞰されるのである。自意識と混沌、本地垂迹、普賢菩薩、など。

▼土屋昌明編　専修大学社会科学研究叢書10『**東アジア社会における儒教の変容**』（三九九〇円）東アジア世界が一つの歴史世界と目されるのは、漢字、儒教、律令制度といった共通文化要素のためである。人類学、文学、思想史の観点から文化の変容を考察し、もって東アジア世界における文化・社会の共通性と多様性を問い直す。

大正大学出版会

▼『**人間っていいな　社会福祉原論Ⅰ**』（大正大学社会福祉研究会編　A5判　一八九〇円）。大学一年生にも理解できるよう簡明でわかりやすいビジュアルな表現で、社会福祉の思想、歴史、原理、理論、方法、分野などについて論述している。さらに社会福祉の専門領域に深く分け入ることができる道筋を示している。社会福祉学入門のテキスト。『**社会福祉原論Ⅱ**』を二〇〇八年四月刊行予定。

▼『**増上寺日鑑**』第5巻（宇高良哲編　B5判　一〇五〇〇円）将軍徳川家の菩提寺として知られている芝増上寺に現存する江戸期の日鑑を翻刻した資料集。増上寺史の研究、江戸幕府の宗教政策などを研究する上での恰好の史料である。

▼『**「女性自身」が伝えたアメリカの戦争**』（松田優・寺坂有美編著　B5判　二九四〇円）は、新聞や雑誌に書評が掲載された。本会刊行物としては初めてのことで、学生の卒業論文が刊行の動機になっていること、またメディア論・現代史・女性史などの分野で注目されたのではないかと考えている。

玉川大学出版部

▼『**日本の教育**』岡村豊著（A5判・四七二五円）教育運営担当者必携の書！現行教育制度の基礎知識を初めて体系化。学校教育、社会教育、生涯学習の実態と運用について解説する。

▼『**日本の大学教授市場**』山野井敦徳編著（A5判・六〇九〇円）大学教授市場はどう発展してきたのか。帝国大学創立以降の展開を考察し、流動性のある市場にするための問題提起を行う。

▼『**大学教育を変える教育業績記録―ティーチング・ポートフォリオ作成の手引**』P・セルディン著　大学評価・学位授与機構監訳　栗田佳代子訳（A5判・五七七五円）教育業績の評価と教育活動の改善に使われるティーチング・ポートフォリオの作成から学問領域別の実例まで。

▼『**新説　教育社会学**』加野芳正・藤村正司・浦田広朗編著（A5判・二五二〇円）現代社会で生起するさまざまな教育問題や現象に、社会学的にアプローチする方法を学ぶためのテキスト。

中央大学出版部

▼植野妙実子・林瑞枝編『**ジェンダーの地平**』（二五二〇円）フランスの多方面における女性政策を分析し、日本の女性政策の新たな地平を考察する。

▼小島武司編『**日本法制の改革：立法と実務の最前線**』（一〇五〇〇円）近未来の日本法制の姿を司法改革を中心に先端的視点から探る。日本比較法研究所叢書74。

▼片桐・御船・横山編『**分権化財政の新展開**』（四〇九五円）地方分権の税財政問題を理論と実証、制度と政策、国際比較から分析する。経済研究所叢書44。

▼服部・土田・後藤編『**戦間期の東アジア国際政治**』（七六六五円）第一次大戦後、柳条湖事件から盧溝橋事件、日中全面戦争の三期に分け検討する。政策文化総合研究所叢書6。

▼片桐稔晴著『**古典をひもとく社会思想史**』（一九九五円）ヨーロッパ近代社会の思想家たちの著述から市民社会、自治・分権社会と経済学との関係を解明する。

▼島田次郎著『**日本の大学総長制**』（二四一五円）国立大学、私立主要十六大学の総長制・学長制の歴史と役割を比較し、その得失を厳しく検証する。

東京大学出版会

▼「**シリーズ国際関係論**」（全5巻）

国際関係論においては、国際社会の秩序はいかにして成り立っているのか、いかに戦争を防止して平和や安全保障を達成するのか、国際関係において政治（力）と経済（利益）はどのような関係にあるのか、国家はいかなる原理に基づいて対外的に行動するのかといった問いが、基本テーマを構成してきた。

本シリーズは、国際関係論の成果を総合することによって、これらの古くて新しい課題に挑戦するものである。

第1巻『**国際社会の秩序**』（篠田英朗著）は歴史と思想を重視した国際社会論を、第2巻『**平和と安全保障**』（鈴木基史著）は理論的・実証的な平和・安全保障論を、第3巻『**国際政治経済**』（飯田敬輔著）は同じく理論的・実証的な国際政治経済論を、第4巻『**国家の対外行動**』（須藤季夫著）は外交研究や対外政策決定分析を超えてより包括的な対外行動論を、そして第5巻『**国際関係論の系譜**』（猪口孝著）は二〇世紀および日本を軸にした国際関係論の系譜論を、それぞれ展開している（各巻二六二五円）。

東京電機大学出版局

▼『**技術は人なり。―丹羽保次郎の技術論**』（東京電機大学編／一六八〇円）

丹羽保次郎は、日本独自の技術でファクシミリの開発を成功に導いた日本を代表する技術者の一人であり、東京電機大学初代学長でもある。「技術は人なり」とは、丹羽が自らの経験を踏まえ、教育・研究の理念として示した言葉である。

本書では丹羽自身の言葉による技術者像と若い技術者へのメッセージを紹介した。技術を志す人にとって、時代を越えた指針となるべくまとめられた一冊。

▼『**技術史から学ぶ情報学**』（小山田了三・小山田隆信著／二五二〇円）

コンピュータを中心とする情報技術の発展・普及による技術進歩は、情報技術の社会への影響力をますます大きくしているように見える。その一方、情報機器の技術面に対する人々の理解は急速に低くなってきたが、むしろその理解の重要性はさらに増しているといえる。

本書は、情報の技術史を追いながら、情報学の領域を見渡す情報全般の基礎的な知識をも学べる内容とした。情報学の初学者を対象とした一冊である。

東京農業大学出版会

▼**シルクロードの経済人類学―日本とキルギスを繋ぐ文化の謎―**　栗本慎一郎著

日本文化の大きな基礎は北のシルクロードの文明文化からやってきた。序章スメラミコトの降臨　第一章真のシルクロード　第二章北のユーラシア草原東部の世界　第三章蘇る草原の大帝国西突蕨　第四章セミレチアの謎

平成一九年八月／四六判

二五九頁／税込価格三一五〇円

▼**環境修復の技術―地域環境科学からのアプローチ―**　東京農大環境科学研究所編

三年間のプロジェクトにおける研究の蓄積や経験を加えた技術書として現場の実務や実践に役立つ一冊。

平成一九年七／B5判

一四三頁／税込価格二一〇〇円

▼**挑戦者たち―オホーツクを巣立った卒業生―**　東京農大生物産業学部編

東京農大生物産業学部卒業生たちの多方面多様な活動がまとめられている。

平成十九年三月／四六判

一二四頁／税込価格一六八〇円

法政大学出版局

▼J・グレーシュ／杉村靖彦他訳『**「存在と時間」講義**』（一二六〇〇円）解釈学的現象学の立場からハイデガーのテキストを統合的に読解し、その思考の「生成の現場」を浮き彫りにする。

▼E・フォール／渡辺恭彦訳『**チュルゴーの失脚**』上下（上＝六八二五円／下＝五七七五円）チュルゴーの失脚を招いた民衆暴動＝小麦粉戦争を軸に、一八世紀フランス社会のドラマを描き出す。

▼牧野英二著『**崇高の哲学**』（二七三〇円）バーク、カント以来の崇高概念、近代崇高論の地平を踏まえ、人間と自然、自己と他者、理性と感情の関係など、現代焦眉の課題を根本的に問い直す。

▼W・シヴェルブシュ／福本義憲他訳『**敗北の文化**』（五二五〇円）南北戦争、普仏戦争、第一次世界大戦において敗者はいかにして回復・再生したか。そのエネルギーを比較文化史的に考察する。

▼小川さくえ著『**オリエンタリズムとジェンダー**』（二三一〇円）ロティやプッチーニをはじめ、六つの作品に「蝶々夫人」の系譜をたどりつつ、ジェンダーの本質とその構造に迫る。

武蔵野大学出版会

▼『**仏は叫んでいる**』田中教照著（四六判上製・二七二頁、二〇〇七年十一月刊行予定）著者は『初期仏教の修行道論』などの著書を持つ学究だが、同時に、仏教思想の普及活動にも積極的で、武蔵野大学周辺に住む市民対象の「日曜講演会」でも講師を務めることが多い。その講演をもとにまとめた本書は、人生、家族、教育を考える軸としての仏教思想を平易に説く。四月、小会刊『**いのちは誰のものか**』（山崎龍明編著、B6判・一九二頁、定価一八九〇円、好評発売中）に続く武蔵野大学出版会の一般向け仏教書である。

▼六月の『**環境デザインの試行**』（B5変形・三二〇頁、定価三九九〇円、好評発売中）刊行後、武蔵野大学の創設者で大正新脩大蔵経編纂刊行事業で知られる高楠順次郎の全集完結のための作業に従事。二十年以上前に中断した同全集既刊巻と同じ版元から刊行予定だが、大学出版部として学内編集委員の調整や校正作業に参加している。著作論文目録校正を通じて明治・大正・昭和のデジタル化以前の出版事情に触れ、大蔵経刊行がいかに大事業であったか、改めて感じている。

武蔵野美術大学出版局

▼『ムサビ日記』手羽イチロウ監修、四六判、二六四頁、定価一二六〇円

のんびりと日がな一日、絵筆を握っているイメージが世間では定着しているらしいが、実際の美大生はたいそう忙しい。武蔵野美術大学（通称ムサビ）企画広報課の職員である手羽が、数年前に個人で始めたサイト《ムサビコム》。ここに在学生有志が集まり、お気楽・気ままに「リアルな美大の日常」を書きだした。よもや出版されるとは思ってもみなかった二〇〇六年度《ムサビコム》メンバー二七人による日記一四六本が一冊に。課題提出に迫られ、就職活動に焦り、卒業制作に追い込まれる彼らに、手羽が愛情たっぷりのツッコミを入れ……一般のブログ本と一線を画すのは、「手羽註」と呼ばれるこのツッコミ。「ネガティブなことも違う発想で面白く考えてしまう」ムサビ・スピリッツはいかに形成されるのか？　ファシリテーター手羽による美大ガイドとしても楽しめる。美大進学を目指す受験生はもちろん、芸術を志す子弟をみまもる保護者の方々に御一読をオススメする。

明星大学出版部

▼**現代公教育との対話**
―「教育国家」の創造と「スクール・ガバナンス」の確立―
樋口修資著
A5判上製・本文三八〇頁・三一五〇円

「知のあり方」の問い直しとその再編、国民の教育に対するニーズの多様化・高度化に対応する教育の転換が問われている。質の高い教育、基礎・基本を身に付けた心豊かでたくましい子どもの形成を実現するための、公教育の制度設計と内容構築を語る教育論集。

▼**教育行財政概説**
―現代公教育制度の構造と課題―
樋口修資編著
A5判四二〇頁・二八三五円

▼**人間性と人間形成の教育学**
青木秀雄著
A5判三八〇頁・二六二五円

▼**教育方法の理論と実践**
小川哲生・菱山覚一郎著
A5判一六八頁・定価一五七五円

▼**初等教育原理**
明星大学初等教育研究会編
A5判三五六頁・定価二五二〇円

早稲田大学出版部

▼『**時代を紡ぐ教育論**』（渡辺重範、二一〇〇円）時代の奔流に巻き込まれながらも、小さな勇気を奮い起す。本・映画・音楽等のテーマに即して、「愚直」に生きる大切さを語りかける教育論。

▼『**内部労働市場とマンパワー分析**』（P・ドーリンジャー／M・ピオレ、白木三秀監訳、三七八〇円）内部労働市場は雇用制度・熟練技術・資格取得等に至るまでいかなる影響を及ぼすのか。古典的名著の待望の翻訳。

▼『**統合型ブランドコミュニケーション――マーケティングコミュニケーションの新展開**』（東英弥、六〇九〇円）製品開発から広告、販売促進、流通までを一貫した戦略で統合するマーケティングコミュニケーションの新方式を提案。選ばれるブランドをつくる！

東海大学出版会

▼高田浩二著『**海のふしぎ「カルタ」読本**』（二一〇〇円）

本書は、海の中道海洋生態科学館館長である著者が、二〇〇五年九月から一年間、朝日新聞西部本社に連載した「海の不思議カルタ」をまとめたものである。

あ　蜊（あさり）、蛤（はまぐり）、蛸（たこ）坊主　海にいるのに　なぜか虫

い　胃の中の寄生虫　大海を知らず??

は　歯ブラシも　歯医者もいらぬ　いつも新品サメの口

を　「を」がついた魚はいない　「お」はお魚と使うのに

など、全四六題で名前の由来、生態的特徴、エピソードなどを紹介している。

用紙も厚く、絵札と読み札も印刷されているので、切り抜けば実際のカルタとしても使えるようになっており、遊びながら学ぶこともできる。

名古屋大学出版会

▼川島真／服部龍二編『**東アジア国際政治史**』（二七三〇円）最新の研究成果に基づき、前近代の「伝統的」国際秩序の変容から、今日の東アジア国際政治までを一望する画期的な通史テキスト。

▼田野大輔著『**魅惑する帝国―政治の美学化とナチズム―**』（五八八〇円）総統、労働者、民族共同体を軸に「芸術作品」として創造された第三帝国。政治の美学化による支配の現実を解明する。

▼高橋　亨著『**源氏物語の詩学―かな物語の生成と心的遠近法―**』（八四〇〇円）語りの心的遠近法の視座から、言葉のあやが織りなす源氏物語の多声的世界を色彩豊かに読み解いた渾身の論考。

▼齊藤泰弘訳『**ゴルドーニ喜劇集**』（八四〇〇円）ヴェネツィア社会を映し出す滑稽で愛らしい人間ドラマ。代表作『コーヒー店』ほか、本邦初訳作を中心に、味わい深い傑作群を収めた本格的選集。

▼D・ボードウェル／K・トンプソン著藤木秀朗監訳『**フィルム・アート―映画芸術入門―**』（五〇四〇円）この一冊で、きっと映画の見かたが変わる！　アメリカで最も定評ある映画入門、待望の邦訳。

三重大学出版会

当会の記念事業である「日本修士論文賞」の第四回受賞作が出版されました。

▼『**満洲愛国信濃村の生活**』趙彦民著
A5判　二二七頁
定価一八九〇円
送料無料。

旧満洲国愛国信濃村の開拓民として逆境を生き抜き永住帰国した三氏に対する聞き取り調査。

▼『**ボランティア社会の誕生**』中山淳雄著
A5判　二六八頁
定価一九九五円
送料無料。

ボランティア元年と言われる一九九五年の阪神淡路大震災を基点に日本国内のボランティア活動を詳細に分析し、「ボランティア社会の誕生」過程を説く。

京都大学学術出版会

▼『**生物資源から考える21世紀の農学**』全7巻　野田公夫編（A5判・上製・奇数月十日頃刊行）人間社会の基底である「農」が、今「環境」と「グローバリゼーション」の狭間で揺れ動いている。我々はそこにどんな展望を描けるのか。

［既刊］第二巻『**家畜生産の新たな挑戦**』今井　裕編（三三六〇円）

第七巻『**生物資源問題と世界**』野田公夫編（三三六〇円）

▼『**環境ガバナンス論**』松下和夫編著（A5判・上製・三一七頁・四四一〇円）複雑で重層化した環境問題にどう対処するか。ガバナンス論を基礎に、NGO・企業の取り組み、流域管理、都市形成の事例から、解決策を提示する。持続可能な社会の構築に向けた環境政策論の到達点。

▼『**京都大学講義「偏見・差別・人権」を問い直す**』竹本修三・駒込武編（A5判・上製・二八九頁・二三一〇円）大学で人権を語るなど、どこか胡散臭い。話す前からオチが見える。でも人権という言葉を切実に必要とする人びとがいるのもまた確かだ。では、どう語れば良い？大学人が戸惑いや痛みを隠さずに語る。

大阪経済法科大学出版部

▼『**債権各論　改訂版**』西山井依子著（A5判・四三八頁・二五二〇円）民法の現代語化や、旧版以降の判例の動向をふまえ、債権各論の基本的な知識と体系的な概念を、重要判例や解説をもとに、説述した改訂版です。債権各論を学ぶ学生や社会人および、資格取得めざすみなさんのために、是非理解してもらいたい、債権各論の基本的な知識と体系的な概念を、できるだけ簡単かつ明確に、判例を引用しつつ、より具体的に説述しました。

本文の簡明な記述の理解を深める注釈を後注や脚註とせず、そのすぐ下に注釈として、関連する重要判例や対立争点の解説などをおくことにより、基本的な知識や体系的な概念を即座に、具体的に理解できるように配慮しました。これだけの基本的な知識や体系的な概念と重要な解説を掲載し、四〇〇頁以上のボリュームがありながら、定価二五二〇円の低価格を実現しました。

▼既刊『**債権総論改訂版**』西山井依子著（A5判・三三〇頁・二一〇〇円）

▼刊行予定『**急成長現代企業の経営学**』宮脇敏哉著（A5判・二三一〇円）

大阪大学出版会

▼教養書シリーズ・阪大リーブル・三谷研爾編『**ドイツ文化史への招待　芸術と社会のあいだ**』（四六判・並製・二九六頁・二一〇〇円）中欧を舞台に繰り広げられてきた、近代ドイツの芸術と社会のせめぎあい。その歴史を、表現活動と日常生活との密接なつながり、ドイツとユダヤの共存の夢、現代社会を斬り結ぶモダニズム芸術の挑戦という三つの位相から追う。芸術文化の奥行きにふれる、読み応えあるガイドブック。

▼大阪外国語大学との統合を迎え、新・語学教科書シリーズを創刊。第一弾は、小角典夫・深澤一幸編『**初級中国語【CD付】**』（A5判・並製・三〇〇頁・二二〇五円）。日常会話に重点を置き、練習問題と語句一覧、索引付きで、一冊で中国語を学べる。付録CDで発音学習も可能。

▼大阪大学新世紀レクチャー・粟津邦男著『**赤外レーザー医学**』（A5判・並製・一五〇頁・予価一五七五円）近年急速に進展しつつある赤外域のレーザー光源開発。医療分野での応用について、最新の知識と情報を解説。工・医・歯学部などの教科書に最適。

関西大学出版部

▼吉田永宏著『**日本近代文学と思想性**』（A5判・四五一五円）主として昭和期の作家・作品を、プロレタリア文学を中心として、文学史の流れの中で広く取り上げている。思想史・人権問題の視点から近現代文学に迫る。

▼岩田年浩著『**経済学教育論の研究（増補版）**』（A5判・三九九〇円）経済学諸学派に通じた著者ならではの理論と現実を解説。各国の大学や経済学教育の事情を調査充実し、経済学教育という未開拓分野をまとめ上げている。

▼陶徳民著『**明治の漢学者と中国―安繹・天囚・湖南の外交論策―**』（A5判・三四六五円）明治大正期に唱えられた中国への政策について、政府や軍部と関わりを持った漢学者の提言を通じて考察し、対中国姿勢の変遷を跡付ける。中国要人との繋がりを明かす裏面史でもある。

『明治の漢学者と中国』
定価3465円

関西学院大学出版会

新刊

▼平林　喜博著
『**会計史への道―一つの覚書―**』（A五並製・三一六頁・定価二五二〇円）

▼小西　砂千夫著
『**自治体財政のツボ―自治体経営と財政診断のノウハウ―**』（A五並製・二二〇頁・予価二三一〇円）

▼上谷　佳宏編著　東町法律事務所編著
『**実践ビジネス法務―体験してみる企業法務の最前線―**』（A五並製・二二〇頁・定価二三一〇円）

▼村尾　信尚監修　澤　昭裕編著・WHY　NOTメンバー著
『**無名戦士たちの行政改革―WHY　NOTの風―**』（四六並製・三四四頁・定価一九九五円）

▼今田　寛著　他著
『**心理学の大学・大学院教育はいかにあるべきか**』（A5並製・七〇頁・予価七三五円）

九州大学出版会

▼『**純化の思想家ルソー**』細川亮一（A5判・三二〇頁・五〇四〇円）「人間・市民・孤独な散歩者」という三つの理念型の解明を通して、ルソーを純化の思想家として捉え直す試み。

▼『**音のデザイン―感性に訴える音をつくる―**』岩宮眞一郎（A5判・一八八頁・二五二〇円）製品の音、サイン音、公共空間の音環境などを対象とした音のデザイン技法の解説。

▼『**これからのキャンパス・デザイン―九州大学伊都キャンパスと学術研究都市をつくる―**』九州大学新キャンパス計画推進室編　新しいキャンパスと学術研究都市づくりの記録。写真や図面類多数収録（オールカラー）。

A4変型判・184頁
定価：2,940円

有限責任中間法人 大学出版部協会賛助会員

【50音順】2007年11月30日現在

株式会社朝日新聞社	〒104-8011 東京都中央区築地5-3-2
亜細亜印刷株式会社	〒380-0804 長野県長野市大字三輪新屋1154
株式会社アベル社	〒162-0825 東京都新宿区神楽坂2-19 銀鈴会館408
王子製紙株式会社	〒104-0061 東京都中央区銀座4-7-5
株式会社大森印刷	〒105-0003 東京都港区西新橋3-17-1
岡本出版発送株式会社	〒353-0001 埼玉県志木市上宗岡3-16-2
城島印刷株式会社	〒810-0012 福岡県福岡市中央区白金2-9-6
株式会社協栄アドインフォ	〒101-0054 東京都千代田区神田錦町1-14 立花日英ビル2F
株式会社クイックス東京	〒170-0013 東京都豊島区東池袋4-27-14 山京システムビル4F
港北出版印刷株式会社	〒150-0002 東京都渋谷区渋谷2-7-7
三美印刷株式会社	〒116-0013 東京都荒川区西日暮里5-9-8
三立工芸株式会社	〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-4
三和印刷株式会社	〒381-2226 長野県長野市川中島町今井字薬師寺1822-1
信濃印刷株式会社	〒102-0072 東京都千代田区飯田橋4-1-11
新日本印刷株式会社	〒162-0845 東京都新宿区市谷本村町3-29
株式会社鈴木製本所	〒112-0014 東京都文京区関口1-17-5
ダイニック株式会社	〒105-0012 東京都港区芝大門1-3-4 ダイニックビル7F
株式会社太洋社	〒501-0431 岐阜県本巣郡北方町北方148-1
宗教法人天然寺	〒204-0021 東京都清瀬市元町1-4-5-711
東一紙業株式会社	〒101-0047 東京都千代田区内神田1-12-7
株式会社東京弘報社	〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-34
株式会社とうこう・あい	〒104-0061 東京都中央区銀座8-11-11
株式会社日本経済新聞社	〒100-8066 東京都千代田区大手町1-9-5
株式会社博報堂	〒108-0023 東京都港区芝浦3-4-1 グランパークビル17F
株式会社平文社	〒170-0005 東京都豊島区南大塚2-35-7
株式会社毎日新聞社	〒100-8051 東京都千代田区一ツ橋1-1-1
株式会社遊文舎	〒532-0012 大阪市淀川区木川東4-17-31
株式会社読売新聞東京本社	〒100-8055 東京都千代田区大手町1-7-1

有限責任中間法人大学出版部協会は、私たちの活動をご理解・ご支援下さる皆様による「賛助会員」制度を発足いたしました。ここに趣旨にご賛同・お申し込みを頂きました各社様をご紹介させていただきます。 なお「賛助会員」に関するお問い合わせは協会事務局までお寄せ下さい。

有限責任中間法人大学出版部協会　加盟出版部一覧

北海道大学出版会
〒060-0809 札幌市北区北9条西8丁目 北海道大学構内
TEL 011-747-2308　FAX 011-736-8605

弘前大学出版会
〒036-8560 弘前市文京町1番地 弘前大学附属図書館内
TEL 0172-39-3168　FAX 0172-39-3171

東北大学出版会
〒980-8577 仙台市青葉区片平2-1-1 東北大学構内
TEL 022-214-2777　FAX 022-214-2778

流通経済大学出版会
〒301-8555 龍ヶ崎市平畑120
TEL 0297-64-0001　FAX 0297-60-1165

聖学院大学出版会
〒362-8585 上尾市戸崎1-1
TEL 048-725-9801　FAX 048-725-0324

聖徳大学出版会
〒271-8555 松戸市岩瀬550
TEL 047-365-1111　FAX 047-363-1401

麗澤大学出版会
〒277-8686 柏市光ヶ丘2-1-1
TEL 04-7173-3320　FAX 04-7173-3154

慶應義塾大学出版会
〒108-8346 港区三田2-19-30
TEL 03-3451-3168　FAX 03-3451-3124

ケンブリッジ大学出版局
〒101-0054 千代田区神田錦町1-10-1 サクラビル1階
TEL 03-3291-4068　FAX03-3219-7182

産業能率大学出版部
〒100-0005 千代田区丸の内1-7-12 サピアタワー9階
TEL 03-6266-2400　FAX 03-3211-1400

専修大学出版局
〒101-0051 千代田区神田神保町3-8-3 専修大学5号館6階
TEL 03-3263-4230　FAX 03-3263-4288

大正大学出版会
〒170-8470 豊島区西巣鴨3-20-1
TEL 03-5394-3026　FAX 03-5394-3038

玉川大学出版部
〒194-8610 町田市玉川学園6-1-1
TEL 042-739-8935　FAX 042-739-8940

中央大学出版部
〒192-0393 八王子市東中野742-1
TEL 042-674-2351　FAX 042-674-2354

東京大学出版会
〒113-8654 文京区本郷7-3-1 東京大学構内
TEL 03-3811-8814　FAX 03-3812-6958

東京電機大学出版局
〒101-8457 千代田区神田錦町2-2
TEL 03-5280-3433　FAX 03-5280-3563

東京農業大学出版会
〒156-8502 世田谷区桜丘1-1-1
TEL 03-5477-2562　FAX 03-5477-2643

法政大学出版局
〒102-0073 千代田区九段北3-2-7 法政大学一口坂校舎内
TEL 03-5214-5540　FAX 03-5214-5542

武蔵野大学出版会
〒202-8585 西東京市新町1-1-20 武蔵野大学構内
TEL 042-468-3003　FAX 042-468-3004

武蔵野美術大学出版局
〒180-8566 武蔵野市吉祥寺東町3-3-7
TEL 0422-23-0810　FAX 0422-22-8309

明星大学出版部
〒191-8506 日野市程久保2-1-1
TEL 042-591-9979　FAX 042-593-0192

早稲田大学出版部
〒169-0071 新宿区戸塚町1-104-25
TEL 03-3203-1551　FAX 03-3207-0406

東海大学出版会
〒257-0003 秦野市南矢名3-10-35 東海大学同窓会館3階
TEL 0463-79-3921　FAX 0463-69-5087

名古屋大学出版会
〒464-0814 名古屋市千種区不老町1 名古屋大学構内
TEL 052-781-5027　FAX 052-781-0697

三重大学出版会
〒514-8507 津市栗真町屋町1577 三重大学図書館3階
TEL 059-232-1356　FAX 059-232-1356

京都大学学術出版会
〒606-8305 京都市左京区吉田河原町15-9 京大会館内
TEL 075-761-6182　FAX 075-761-6190

大阪経済法科大学出版部
〒581-8511 八尾市楽音寺6-10
TEL 072-941-8211　FAX 072-941-9979

大阪大学出版会
〒565-0871 吹田市山田丘2-7 大阪大学ウエストフロント
TEL 06-6877-1614　FAX 06-6877-1614

関西大学出版部
〒564-8680 吹田市山手町3-3-35
TEL 06-6368-1121　FAX 06-6389-5162

関西学院大学出版会
〒662-0891 西宮市上ヶ原一番町1-155
TEL 0798-53-5233　FAX 0798-53-9592

九州大学出版会
〒812-0053 福岡市東区箱崎7-1-146 九州大学構内
TEL 092-641-0515　FAX 092-641-0172

大学出版七二号（二〇〇七年夏・秋）二〇〇七年十一月一日発行　頒価一〇〇円（〒共）　発行所＝有限責任中間法人大学出版部協会　ISSN 0913-3305　振替〇〇一七〇-八-三八九一三
〒一一三-〇〇三四　東京都文京区湯島二丁目一四番一一号　電話〇三（三八三四）六六八六　E-MAIL：mail@ajup-net.com　URL：http://www.ajup-net.com/